

道院

紅卍字会の歴史

非売品

# 道院と紅卍字会の歴史

## 目次

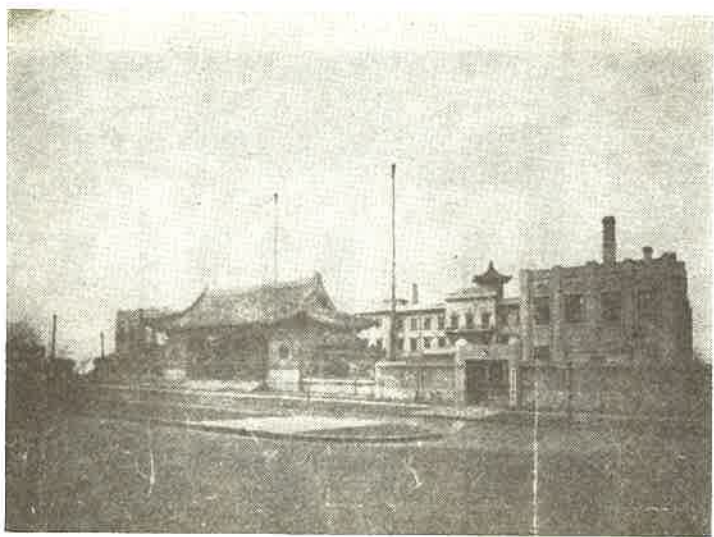
- (一) 道院と紅卍字会の由来概略……………七
- (二) 道院の出現と紅卍字会誕生の関係……………二〇
- (三) 修道とは何か……………二六
- (四) 道を行えば福がある……………三〇

⑤ 慈善とは何か……………三六

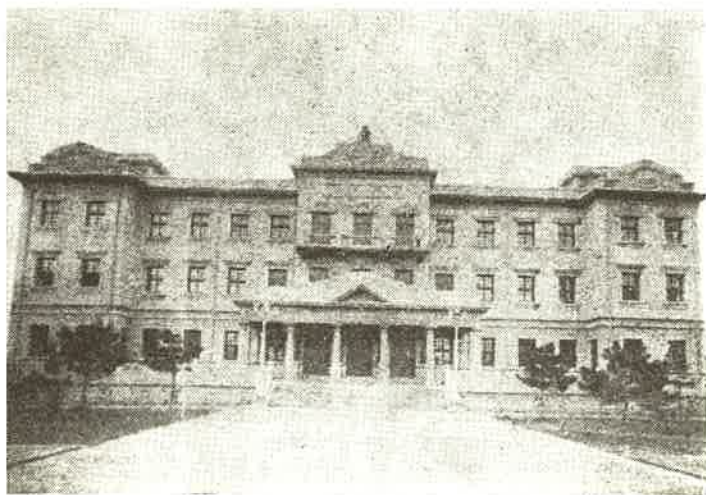
⑥ 勤勉儉約……………三九



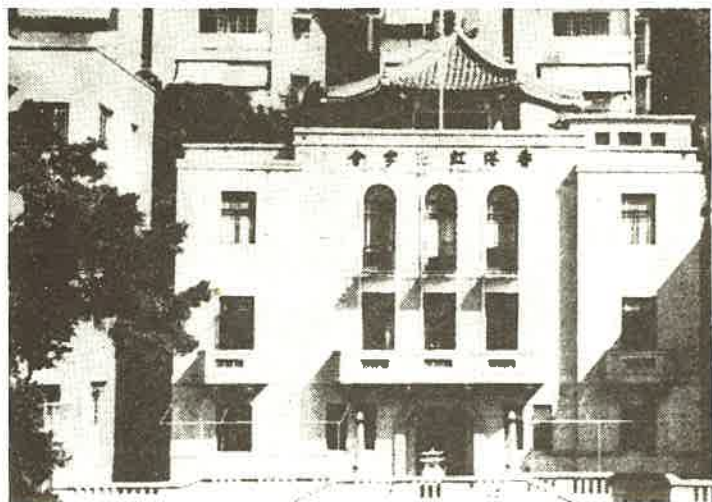
濟南母院辰光閣



世界紅卍字會舊滿洲國校會全景



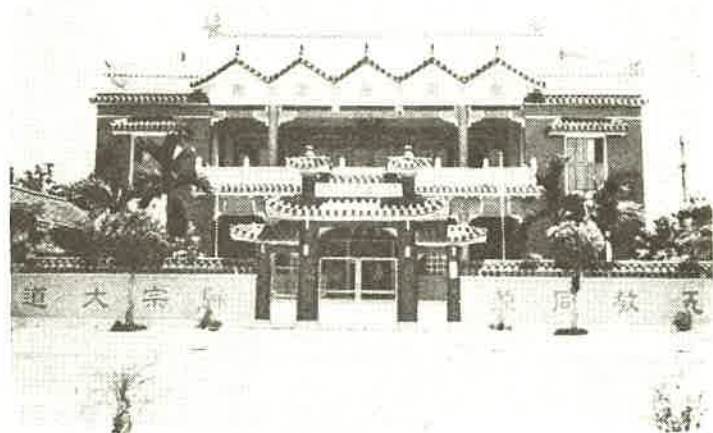
世界紅十字會舊滿洲國總會、滿洲國紅十字學院



宗母院駐港辦事處、香港紅十字會



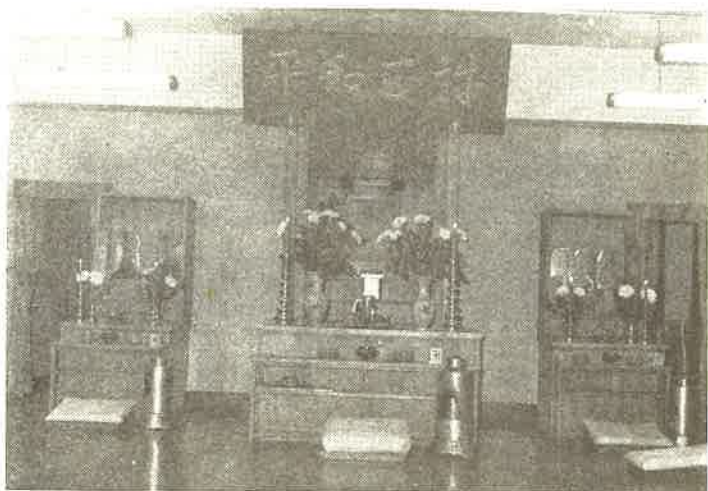
世界紅十字會台灣主會



世界紅十字會台中分會



世界紅卍字会シンガポール総主会



東京総院日本紅卍字会

## (一) 道院と紅卍字会の由来概略

中国山東省<sup>ひんせん</sup>濱<sup>ひん</sup>県の県公署（県政府の役所）内に昔から大仙祠（仙人を祀<sup>まつ</sup>る大きなほこら）があった、それはいつ頃できたものか知る由<sup>ゆ</sup>もないのである。

一九一六年（大正五年）から一九一七年（大正六年）にかけて、時の県知事、呉福永と、駐屯軍部隊長、劉福縁、その幕僚、洪解空、周吉中等が、役所の公務の余暇に、時おりこの大仙祠において壇<sup>だん</sup>を設けては、扶乩<sup>ふうぎ</sup>（註一）によって御神靈の降臨を仰いでいた。

この壇にはいつも尚仙（道院で祀<sup>まつ</sup>られている壇院掌籍、尚真人）が降られて、そこに参列している人々をみな弟子と見なされて、平素から詩や文章を用いて唱和され、誦<sup>ず</sup>えを垂れておられた、それはあたかも温かい心のふれあう師弟の間柄のような親しみと尊敬の念にみちみちていた。

そしてまたその人々に何か事が起り、悩み苦しんで神仙にお伺いをたてるたびごとに、いつも適切明快なる回答が示されるのであった、しかし、その殆んどの教えは、

人として歩むべき人倫の道に違ふことなく、各人が修養によって立派な人格を作りあげるよう懇々と説かれ、さらにその時節を憂いておられる悲憫の情は切々として言の葉ににじみでていた。

ある日、人々が「この宇宙空間における無形の神霊の中で、最も尊い神様はどなたですか、」と、お伺いをたてたところ、尚仙はこれに対して「太乙老人こそ最高至尊の大神様である。私としては余りにも恐れ多くて御降臨を要請することはできません。もし、諸君が本当に敬虔な気持を以てそのことを請い願うのであれば、南極老人に仲介の労をとって頂くようお願いしてみよう。」とお答えになった。

次の日、また扶乩によって御神霊の降臨を仰いだところ、はじめに先ず南極老人がお降りになり、しばらくして、太乙老人と御署名された神様がお出ましになった。この神様こそ最高至尊の

至聖先天老祖なのであった。そしてそこで諄々として述べられる訓誨の御言葉は、すべてが人々に対する一大警告にほかならなかったのである。

一九一八年（大正七年）、呉福永と劉福縁の両氏は転任となったので、呉福永の後任として李智真がそれを継承し、従来通り、常に壇を設けては神霊の御降臨を仰いで

いた、そんなある日の訓文で「いかに素晴らしい山河があつても、それはたちまちにして塗炭の苦しみに変わってしまう、これもまた天數（運命）によるもので、いかんともしがたいのである、下元末期（今世紀がこれに当る）に至ると、数多くの大災劫（災害）が発生する時代に入るのである。」と示された。

一九二〇年（大正九年）、李智真と洪解空の両氏は相繼いで済南の首都に赴いて、前任の呉福永、劉福縁の兩人と面会した、ここにおいてはじめて神縁のある人々の御靈が一堂に相会することになり、ついに劉福縁の邸宅においてまた扶乩の壇を設けて神靈の降下を仰いだのである、その時、壇に参列した人々は三十六人に上り、壇訓による御神示もまた相繼いで盛んに現われるのであつた、それはみな道を修め、身心を養い、命を保ち（天から授けられた本性の命を汚すことなく保つこと）、それによつて人を渡い世を化うための教えであり、これらの教訓によつて人々を激励されたのである。

これら三十六人の中には儒教、道教、仏教の信徒は勿論のこと、さらに回教、キリスト教の信者もそれぞれ一人ずつ含まれており、はからずも五教の信徒がみな同じように敬虔なる誠心を以て、お経を伝授される壇に参列したのである。吾が道の最高の

經典「太乙北極真經」は、この時に伝授されたものであり、思うに五教が合流して、その根源の大道に帰一するのは実はここから始まるのである。

北極真經がこの世に伝えられたことは、とりもなおさず、先天老祖が靈を降されて、この腐敗混濁している世の中を救おうとされる主旨にはかならないので、それを少数の人々のみが、これを私するということは許されない。そこで神示を仰いで、扶乩の壇を設けている場所を「道院」と名づけるようになった、それは「大道の行われるや、天下を公と為す。」(註二)とところから取り、すべて縁につながる多くの人々を普ねく救うところの修道の道場とされたのである。

さらに、すべて入修(入会)する者を修方と言って、道名を賜わるようになり、また入修のときの願言(四つの誓願、註三)を弟子たちに起草させて、それを扶乩の壇において、お伺いをたて、神靈の許可を経て、この時から道院に入る求修の手続きが正式に開始されることになったのである。

まず弟子黙靖(本名は杜賓谷先生の道名、現在道院で祀られている黙真人)が最初の統掌に任命されてから、求修する者が段々とふえてきたので、上新街に家屋を借りて「道院」とした、さらにその「道院」を発展させてゆくには、当然、政府の認可を

經て合法的地位を確立させなければならぬ。それには先ず前提として北極真經の版權を取得する必要があり、内政部に対してその認可登録を申請し、許可されたのである。それより更に進めて道院の基礎を固めるために、十二ヶ条の規約を定め、同じように認可登録を申請して許可されたのである。

ここにおいて一九二二年（大正十年）二月九日を道院開設の日として、全国各省にあまねく通知し、かつまた山東省政府に対する認可申請の手續き一切が新聞に公布された、遂にこの時を以て永遠にゆるぎない道の基礎が確立されたのである。そこで一九二二年（大正十一年）の立春の日を正式の創立記念日と定められたのである。

道による教化の影響力は誠に目ざましく、一日千里の勢いで、たちまちにして天津、北京、濟南の三院が相繼いで成立し、その後が続いて江蘇省の南京、上海、泰県、東台、下関、蘇州、楊州、無錫、常州などがこれに継ぎ、安徽省の蚌埠、蕪湖、合肥、安慶、廬江、鳳陽、潁上、阜陽、河北省の通県、静海、青滄、保定、山東省の益都、沂水などの二十余県、浙江省の杭州、湖北省の武昌、山西省の太原、河南省の開封、東北三省の瀋陽、吉林、長春、卜奎、綏化と、一年の内に六十ヶ所に上る道院が設立された。また四川省の重慶、福建省の福州、廈門、江西省の南昌、九江、貴州省の綏

水、湖南省の長沙、及び熱河、察哈爾、綏遠及び包頭、薩臬などに波及し、つぎには台湾の台北、台南、嘉義、高雄、台中に広まり、道院の普及された地区は全中国の二十三省に及び、合計四百数ヶ所に上る道院が設立されたのである。

海外においても、香港、シンガポール、クアラルンプル、ペナン、イーポ、マラッカなどにも又相継いで成立し、泰のバンコックにも寄修所が設けられ、現在日本では東京総院、神戸寄修所（道院建設準備中）、韓国のソウルなども設立準備中である。

このように道院は一九二二年（大正十一年）に正式に成立して以来、時の流れと共に道務の発展も実に目覚ましく、翌一九二三年（大正十二年）には<sup>まゑ</sup>正会が産まれ、万代にわたる慈業の基礎がここに確立されたのである、これより道と慈は表裏一体として共に重視され、且また双方が一体不可分であることによって大道は益々発揚されるようになった。これは、とりもなおさず、神人共に努力することによって得られたものにはかならないのである。

正会がその根源を道院に発していることは衆知のとおりであるが、しかし、道院には必ず正会を設けなければならないという理由が一体どこにあるのかを、吾ら修方はぜひ知らなければならぬ。

道院が設立されてから、神事の面において示された御経綸によると、現在は下元末期に當っており、世の風潮は浮華輕佻（輕薄）に、そして人心は昏迷惡化していくばかりで、やがてこの大地はあまねく災劫（災害）に襲われることになり、この広大な中国大陸が殆んど沈没する程の大きな禍わざはひによって人々は塗炭の苦しみをなめることになるのである。

これもみな人心の荒廢が自から災劫の原因を造り出すことによって、このような悲惨な結果に陥おちちるのであり、人々が自から造り出したもの（災劫の因）は、当然自からの手によってこれを消滅させ、救わなければならず、故に人は必ず禍（あやまち）を悔改めることによって災劫の因もとが消滅され、そこではじめて天心かみこころに回かへることができるのである。

それには道慈を以て人心を感化するのだから、到底あやまち過あやまちを悔い改めて善に立ちかえることは難かしい。人々が善心に立ちかえることなくして、いたずらに世界の平和や生活の安定を求めようとしても、それは恐らく不可能であろう。

そこで、道は内に修めることを重んじ、慈は外に施すことを重んずるので、道は玄妙にして深遠であり、これを見ようとしても見ることは難かしいが、慈は平易にして

明白なのである、故に今日において世界を救おうとするならば、慈善事業を施す以外に善い方策は無い。しかしながら、この広範にわたる世界と膨大な数に上る人類を、どうして少数の人だけであまねくこれを救うことができるであろうか。

それには必ず衆知を集め大勢の力を合わせ、各人が憐れみの心を持って、共に世を救うという願を発し、みんながこぞって大々的に広範囲に慈行を施してこそ、はじめて速やかにその効果を得ることができ、これが道院に紅卍字会の設けられた原因なのである。

卍会が創設されたのは道院の場合と同じように、皆神事上の指示によるものであった。一九二一年（大正十年）に道院が開設されてから、人は修道によってただ自分だけが悟ればそれでよいというのではなく、さらに人を救い世を救う責任があるということを始め知ったのである。そこで自からを修めること以外に、世のため人のために尽くすこともその中に包含されている。

また訓に従って卍会の綱則（大綱の規則）および施行すべき細則（細かい規則）をとりきめ、それを神様に報告し、許可を仰いで、さらに母院（済南道院）において連続三日間会議を開いて討議され、卍会の規模は始めてあらましとこのうこととなつ

た。そこで訓を仰いで世界紅卍字会と名称を定め、内務部に対し認可登録の申請をし、それが許可されて、世のため人のために尽すところの大慈善団体が正式に誕生し、永遠に伝えられるべき不朽の名を残すことになったのである。

一九二二年（大正十一年）十二月七日の壇訓の神示には「世界紅卍字会の創立記念日は、今年、立春の日の寅の時刻（午前四時頃）が適当である、創立記念日の時には、東西両半球の二ヶ国以上の人が必ず参加することによって、はじめて名実共にそなわった会の発足となるのである」と

たまたま修方の中にアメリカの牧師、李佳白（道名を慧白という）氏がおられ、道に対して非常に誠信（まことまこと）を持っていて、創立の機会にめぐりあったので、喜んで創立記念日の式典に参加され、さらに五教の本来の主旨について講演されたのである。開会式の二日前に

至聖先天老祖が親しく御降臨されて「萬載慈基」（万年にわたる慈の基）の四字の書を賜わったので、それを会場にかかげた。三日間にわたるこの会期において、世界紅卍字会の大綱及び中華總會の細目、また一切の重要な案件を通過させたのである。

そして世界紅卍字總會と中華總會は北京に設けられ、また各省、各県にもそれぞれ

の分会が成立し、各項目にわたる慈善事業の業務が開始されたのである。その業務にも、恒久的なもの、臨時的なものがあり、恒久的のものとしては、診療所、医院、身体傷害者収容施設、養老院、孤児院、因利局（無利息で貸付ける金融機関）、平糶局（食糧を安く供給する所）などがあり、臨時的のものとしては、風害、水害、火災、地震および戦乱による災害などの救済がそれである。

一九二三年（大正十二年）日本で関東大震災が起るや訓を奉じて救済米および義捐金を調達して、罹災者の救済に役立てた。これは卍字会が海外に対して施した最初の救済事業であった。

卍字会が設けられた原因は、すでに現われている有形の災を救済することと、まだ現われていない無形の劫をも消滅するためのもので、これは人々の衆知するところである。しかし、世界は広くて、そこに住んでいる人々も膨大な数で、しかも、災劫は何時、何処で起きるかわからず、その場合、少数の卍字会だけの力を以てしては到底解決できないのである。

そこで、ある地区の災劫を消滅させようとするれば、先ずその地区に必ず卍字会を設けなければならぬし、全世界から災劫を無くそうとするれば、全世界の地区に必ず卍字会

を設けなければならないのである。

たとえば、ある地区で災害が起った場合、他の地区の卍会が救済しなければならぬいとすれば、それは移動のために転々として時間を費すだけでなく、また救済すべき時機をも失うことになりかねない、且また往復の奔走にも多くの慈善金を浪費することになる。更にその地区の人々と土地にもなじみがうすく、不案内であれば、折角の慈善救済事業もうまくゆかないという恐れがでてくるのである。ましてや、その地区の人心がとくに腐敗している場合には、その隠れた無形の災禍（無形の災禍が有形に現われてくる）を消滅させようとしても、それを期待することはできないのである。

もし、その地区に卍会を設けることができれば、現地の人が現地の災害を救済することになるので、必ず自から特別の努力をできるようになり、たとえ、それがいかに苦しいことであっても、必ず苦勞を苦勞とせず、疲れを疲れと思わずに尽力することであるう、更に前に述べた他の地区から来て救済する上でのいろいろな不便がなくなるので、一円の銭は十円にも活用できるし、一日で十日分の仕事ができるので、その効果からいってもはるかに勝っている、その上で相互に援助しあいながら緊密な連繫をとっていけば、慈善事業の範圍をさらに拡大することができるのである。

しかし、一ヶ所に新しく卍会を設立しようとすれば、先ず二つの要素をそなえなければならぬ、一つは人力であり、一つは財力である、この二つの中で、どれ一つが欠けても設立はできない。

現在の人心は利益のみを重視して道義を軽視する傾向にある、だから自から財を費して身心を勞し、骨惜しみをしないで世のため人のために尽くそうということは誠に容易なことではないのである。

それには必ず道慈の眞の主旨を広く知らせ、人心を正すことに力を尽くし、世の中の人々に大難が目前に迫って来ていること、自分自身もその劫数（劫の運命）の眞只中におかれているので、そこから自分が救われたければ人を救うことであり、人を救うということは実は己自身を救うことになるということ深く知らせることである。

道慈の眞の主旨を明かにしようとすれば、ただ人を励まし、助けて、徐々に善導し、それによって人心を正し、風紀を保ち、礼義を明らかにし、慈善事業を促進することである、また各界、各層の人々にも卍会の眞の主旨が人を救うことである、ということを広くみんなに理解させて、喜んで賛助してもらえようにして、多くの人の善意と誠心を合わせ團結させることによって、はじめて劫数（劫の運命）を消滅して

救われるのである。必ず将来、卍の旗じるしが全世界にあまねくひるがえる時期が訪れてくることであろう。

註、客観的情勢の必要と道慈をより順調に推進するために、一九五〇年（昭和廿五年）の春、世界卍字総会中華総会と天津宗壇と済南母院が香港に於いて駐港弁事処を設立したことから略称して宗母総駐港弁事処、又は総処と称して、海外における道慈の事業発展をつかさどっている。

浜県は道慈発祥の地にして宗壇の所在地でもあるが、交通不便のために天津に移されて天津宗壇と称されている。

済南は道慈発展の地にして母院の所在地でもある、したがって済南母院と称されている。

註一、扶乩。道院の扶乩は大道を宣伝し、劫を化して世を救う上における一種の神意を伝達するところの方便門である。

註二、大道の行われるや、天下を公と為すと礼記に示されている、昔、大道がよく行われた聖世（堯舜禹の三代にわたる治世）を大同の世とって理想的社会とされた、

その大同の世とは即ち「大道の行われるや、天下を公と為す……」の一節に始まる、その意味は大道が世に行われるようになる、私利私慾や私心によって動くことなく、すべて天理、道心、公德心によって動くようになるので世の中がよく治まってくるのである。

註三、四つの誓願、願わくば功行を修めんことを、願わくば上乘に到らんことを、願わくば真諦を得せしめんことを、願わくば衆生を度せしめんことを。

## (二) 道院の出現と紅卍字会誕生の関係

世界各国にある宗教団体は、大小をあわせると数千は下らないであろう。その風俗習慣は各国によってそれぞれ異なっている、その宗旨とするところは、皆人々に善を為すことを勧めるにほかならない。善とは天地の元氣であり、人生の大道であり、至善の所在がすなわち大道の根本である。

その中でも、儒教、仏教、道教、キリスト教、回教の五教が、大道の根本を最も顕著にあらわしている。この立派な教えも永い間受け継がれていくうちに、真の意義は

失われ、根本から離れて、もっぱら枝葉末節のみせんさく追究するということになつた。その結果、ただ教と教が争いを起すだけでなく、一つの教の中からもまた別派が生れてきて、お互に非難攻撃しあい、それこそ戦争による流血の惨事までも引き起しているのである。

そして、当事者はそれぞれに自分の頑かたな見解や意見を固守して、自分のみは常に正しく、人が常に間違っていると思つている。そこで、本来人に善を勧すすめるところの宗旨は一変して、権力地位を奪い合うための手段に利用され、それこそ、これによつて財を集め、これによつて利己的な目的を追究して、最初に各教の聖人が人を救い世を救おうとされた志は完全に滅びてしまつているのである。

本来、教えというのは道から来たものであり、その教えが眞の意義を失なつてしまふと、道は全く滅びてしまうのであり、したがつて人間の道徳が衰退すればする程、大劫は益々悪化し、近代に至つてはもはや全く收拾することができない情勢に迄至つているのである。吾が

先天老祖および五教の教主、諸天仙仏は多くの衆生（人民）が苦しみの世界に沈んでいる姿を見るに忍びず、この俗世間に聖靈を降して、道院を創設されたのである。

そこで慈航（救け舟）を出してあまねく渡い、不伝の秘とされた真経を伝え、先天の坐法を授け、それによって人類が迷いの道から目覚めて正道に立ちかえり、いまにも崩壊せんとしている事態を挽回しようとしておられるのであり、これが道院の世に現われてきた唯一の意義にはかならないのである。

そもそも道院でいうところの「修」とは、「全く私に修めることに在って、事の理に在らず」（註一）と、ひとたび事の理を論ずれば、即ち是非善悪が出てくる。是非善悪が出てくれば、即ち争いの発端になるのである。謂う所の「私かに修める」とは即ち内に省みるところの工夫にして、又即ち身を修め、心を正し、意を誠にするとこの工夫でもあり、すべては自己の身、心、意の上において工夫をなし、外に求めるものではないのである。これは人びとが皆実行できる事であり、最も日常茶飯事のことで、最も容易なことでもある。それは何時でも、何処でも、何事であっても、皆実行できることである。

しかし、このように説くことは容易であるが、いざこれを実行するとなると確かに容易なことではない。実に今日の人類は精神や思いを常に外のことのみ馳せめぐらして、日々を歌舞音楽、色慾、財貨、利益、地位、名誉の世界に迷い溺れて、内を修

め、内に省みることが、一体どのようなことであるのかを全然知らないのである。そこでにわかになを修めるとか省みると言えば、それは時代おくれの古くさい学者先生の言うことであると見なされて、相手にされないのである。そこで

先天老祖は坐功を授けられて、人々の気質を変化させ、それによって外にのみ馳せめぐらしていた精神や思いを徐々に内に収め、固有の元霊（本性）を保全するよう期待しておられるのであり、これはすべてが自からを修め、自からを省みるところの工夫にあるのである。この「内功」（内に自からを修め省みるところの修練）というのは、別に難かしいことはないのです、これを行うことができないうけは、実行しようとしないうからであって、できないのではないのです。もし、人々が内に修め、省みることを重んずるようになれば、劫を消滅させようとしなくても自ら消滅し、世を渡おうとしなくても自から渡られるのである。

そこで人々を坐によって導くことができなければ、渡化（劫を消滅し人を渡うこと）は、やはりこれを広くひろめ、普ねく救うことは難かしいのである。したがって先天老祖は再び紅卍字会を設立せよとの命を下され、専ら慈善救済の事に当らせ、それによって迅速に広く展開されんことを期待しておられるのであり、これを

“外行”（外に慈を行うこと）というのである。

道院は“内功”を修めるところであり、卍会は“外行”を推進するところである。この内功外行（内修外慈とも言う）は一にして二であり、二にして一である、これが道院と卍会が相互に助けあって生成発展するのであって、これを分離させることはできない理由である。

しかも、道は体であり、慈は用である、先に体があつて、後にその用があるので、それが先に道院が立つて、後で卍会が始めて成立した原因である、これがすなわち自然の順序である。それはあたかも母子がしっかりと頼り合っているように、又内功と外行も一方のみを廢するということはできないのである。

最近の院会（道院と紅卍字会）では同時に成立させることが多いが、これは便宜上において、その時代に適応させただけである。そこで内功があつても外行がなければ枯木寒巖に陥ちいり易く、外行があつても内功がなければ慈善の行為がつねに表面的なものだけに終つて内面的に充実固定したものが確立されないのである。これこそ先天老祖が先に道院を創立されて、後に卍会を設立された苦心の存するところである。

われわれ修人が願を起して道を修める以上、何が内功であり何が外行であるかを知って、志を立てそれに従って行い、自からを欺くことなく、自から怠ることなく、偽わらず虚ならず、急がずあせらず、恒にこのことを堅持して、長い間続けていくうちに自から功候（註二）が現われてくるのであり、真経の最初に示されているように「善が是に于いて臻れば、福も亦疆り無し」（註三）という効果が現われてくるのである。

註一、真経に「全く私に修むるに在りて、事の理に在らず」とある、要は自から修めることを以て主と為す、私かに修めるとは即ち潜かに修めるの意味である、修めるとは私を去って誠を存し、人の知ることを求めず、功候が既に到れば自から効果が在るので、事理の講論に在るのではないのである。

註二、功候、身を修めることを功といい、心の悟りを候という。功とは有形に顕現されたものであり、候とは無形に温養されたものである。無形は有形の木であり、有形は無形の用である、さらに無形に温養されたものだけが有形に現われてくるので、少しもこれを他から借用することはできず、少しもたがうことはないのである。

註三、善が是に于いて臻れば、福も亦彊り無し。善とは乃ち道心に復ることであり、福とは天命の結果である、本来は一つのものであり、これが修道の大体の意義である。

### (三) 修道とは何か

道を修めるということを説こうとすれば、千差万別に入りこんでいて、どこから説いたらよいかわからない、しかも、人には皆一身一家の系累があり、事業による束縛などがあるので、道を修めようと思っても、そのように容易なことではないのである。

それに清静（清浄で静寂）な場所もなかなか無く、又深山幽谷の中にある古い洞窟に師匠や道友を訪ねて、道の真髓や奥義を求めすることもできず、たとえ道を修める気持があっても、ただ前途遼遠にして嘆息するだけである。このような考え方や観念は根本的に一つの大きな誤りである。

道というのは天地の間において、人びとが公有（共有）する所のものであり、決し

である特種の人だけが私有独占すべきものではないのである。道は人においては貴賤貧富、智愚の差別がなく、生れると同時にあって、片時も離れることができないところの、すなわち心である。

人には皆心というものがあって、心がすなわち道であり、もし心を能く修めることができれば、それがとりもなおさず道を修めることなのである。いわゆる道を修めるとは実は心を修めることなのである。このように説いてくると、心を修めることがすなわち道を修めることであって、別に何も深遠で奥深く不可思議なものではなく、又別に何も難かしいことはないのである。それは時間を消耗する必要もなく、又清静な場所も必要としないので、ましてや深山幽谷に師匠や道友を訪ね求める必要もさらさらなく、何時でも、何処でも、何事においても、ただ自分から決心をして修めさえすれば、自然にだんだんと道に合するようになるのである。

この心とは乃ち良心であり、又道心でもある。もし何事でも良心にそむくことがなければ、即ち道に合するのである。もし何事においても道に合致すれば、修める必要はないのであり、社会はこのように悪くならず、世界も又このようにまで乱れることはなかったのではないだろうか。今日における人心の悪化は言語を以て形容すること

はできない、それを放任して社会の安定と世界の平和を願っても、それは不可能であるばかりでなく、逆に進めば進む程、安定や平和から遠ざかってゆくのである。

そこで必ず道を修めなければならぬゆえんの重要な鍵は、すべてがこの人心にある。古人には心を治めるところの学問があり、それが世間の道徳を維持するところの不二の法門であったと言ふことができる。

いまの人は道徳を破壊し、廉恥の心を失い、ただ私あるを知って、公があることを知らないのである。それは皆心を修めることを忘れているので、私慾のために幾重にも包圍されて、益々墮落の一途をたどっているのである。万法（有形無形にわたる客観的存在）は皆心によって造り出され、万善（多くの善）は皆心によって生じ、万悪（多くの悪）は皆心によって作られる。したがって聖賢と盜跖（大盜賊）の違い、肖と不肖の別れは、すべてが心を修めると修めないにかかっているのである。

心を修めることは、別に何も難かしいことではないが、今日の人類は虚栄に溺れて、財貨、利益、名譽、地位などのために心を奪われ、自分自身のことばかり考えて、人のことなど眼中にないのである。そこで、にわかになんか心を修めるとは言っても、一体どこから手を着けたらよいのかわからない状態である。

この修めるといふ字はすなわち日常の人として守るべき道や、人に応待し物に接する間に在<sup>あ</sup>って、片時も離れることはできないので、決して高尚な理論をもてあそんで、身近な事実を顧りみないということではない。

昔の聖賢がわれわれのために残してくれた心を修める法則、即ち三省、四勿、五常八徳（註一）及び忠恕の道の如きは、その中の一つでもこれを実行することができれば、とりもなおさず心を修めることになり、もし一つ一つこれを実行することができれば、生きては賢哲として尊敬を受け、死しては必ず聖神仙仏となって仰がれるのである。そこで道を修めては最高の境地に達し、その願を成就することになるのである。

そこで道を修めるといふことは難かしいことであろうか、否、難かしくはないのである。その権限はすべてが自分自身に在<sup>あ</sup>り、自分が修めようとすれば修まり、いかなるものもこれを阻止することはできない、ただ一念の切りかえに在<sup>あ</sup>るだけである。一人が道を修めれば一家が福を得られ、一家が道を修めれば一方が益を獲<sup>え</sup>られる、そこで修人は虚心になって道を修め、実<sup>まこと</sup>の心で道を行ひ、かつ誠を尽くして人々に道を修め道を行うことを勧めれば、それはただ一個人、一家庭の幸福だけでなく、社会の安

定実利もすべてがこれにかかっているのである。

註一、三省、論語に「吾日に吾が身を三省（反復してその身を省みる）す、人の為に謀りて忠ならざるか（誠心を以て人の為に謀ったか）、朋友と交わりて信ならざるか（信義に欠けることはなかったか）、習わざるを伝えしか（自分が未だ習得していないことを口先だけで人に受売りしなかったか）」とある。

四勿、論語に「非礼視ること勿れ、非礼聴くこと勿れ、非礼言うこと勿れ、非礼動くこと勿れ」と、程伊川は更に「四者（視聴言動）は身の用なり（人身の作用）、中によりて外に應ず、外を制するは、その中を養うゆえんなり」と

五常、人の常に行うべき五倫の道、父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝。

八徳、仁義礼智忠信孝悌の八つの徳目を指す。

#### (四) 道を行なえば福がある

人の一生というのは賢愚（賢い人と愚かな人）、貧富にかかわらず、皆衣食に充分

満ち足りた豊かな生活を望み、立身出世して高位高官につくことを願っており、これらの欲望のために、いろいろな手段方法をめぐらして日夜つとめはげんでいるのである。

ところが欲望の谷間というのは、とても深くて、これを埋め尽くすことはできない、それは貧しい人が富んできて、足ることを知らず、更に多くの富を求めようと、愚かな人が貴くなっても、足ることを知らず、もっと貴い名誉や地位を望むのである。その靈格が中上の者は比較的法律に従い、規則を守ることができが、その靈格が中下の者は往々にして自己の欲望を達成させたいために、天理道德にそむいて破廉恥なことをし、その結果さんざんな目にあい、それでも期待した欲望が実現できるとは限らないのである。たとえ幸いにして一時的にその望みを達したとしても、災難がまたたく間にやってくるのである。(天理道德にそむき破廉恥な行為によって自ら作り出した劫が災難を招くのである)

実に人の心というものは、物欲のために引きずられ、物欲のために迷わされ、惑わされて、物欲の支配下におかれ、本来の主宰を全く失っているのである。そして社会的に成功した極く少数の幸運な者を見れば、それが天理道德にかなっているかどうか

等は問題にせず、ただ自分もこれにあやかりたいと思い、それを自分の希望とし、目標として、これを見習い、みんなが先を争って、それに傾倒しているのであり、これこそ実に「乱」の初まりである。その精神と心靈面における苦痛に至っては実に言語を以て比喩することはできないのである。

人生というものには、各人それぞれにその本分と義務があり、即ち「位に素して行ない」（註一）「君子は思うこと其の位を出でず」（註二）といわれている。ただ自分が尽すべき本分と義務に恥ることがなければよいので、出処進退はその自然にまかせ、進んでも喜ぶことなく、退いても憂うことなく、その境遇に應じて自分は自分の分を尽くすのである。そうすれば心神の上に於ける恬適（快適）はまたたとえようもないのである。

福祿富貴、吉祥安楽快適にして、人びとが安居樂業することに至っては、これを求めるのに道があり、これを得るのに理ことわりがあるのである。それが謂う所の善を積めば祥（吉祥）を降し、善を為せば福を獲るといふことである。善とは即ち天の道であり、天の道はもとかえることを好み（註三）、感ずることがあれば必ず応ずるのである。善は貴重な最高の宝物であり、一生涯これを用いても尽きることはないのである。

ただ誠心を以て善に志し、善い事を多くなし、小さいことを積み重ねて大きくし、少いことを積み重ねて多くし、それを長い間続けていくうちに、自然に多くの福が集まってきて、福は求めなくても自から来るようになる。いわゆる「積善の家に必ず余慶あり」(註四)といわれているように、善を為すのは最も楽しいことである。これを天理道德にそむき破廉恥な行為を以てめげ目なく立廻り、うまいことをする者と、どうして同じように語ることができるであろうか。

ましてや因果応報については仏教でも詳しく説かれているように、瓜を植えれば瓜がなるし、豆を植えれば豆がなるのであり、それと同様に善を為せばこれに多くの祥しあわせが降り、不善を為せばこれに多くの災わざわいが降るのである。禍わざわいと福には門がなく、ただ人が自からこれを招くだけであり、善悪の報むくみいは影の形に添うようにてきめんである。又禍と福はみな自分からこれを招かないものはないので、これは皆聖神仙仏が明らかにわれわれに告げていることである。これを古今往來の歴史に照らしてみても、明らかで少しも違ちがうことはない。それであるにもかかわらず何を苦しんで物欲に引きずられて一生涯を苦海の中で溺れているのであろうか。仏教では「苦海(苦しい世の中)は辺かたみ無いが、頭を回らせば岸である(改心して善にたちかえれば救われる)」と言い、

また善には福が訪れ、悪には禍が訪れると、これによっても善悪禍福は全く自業自得によるものであることがわかるのではないだろうか。

善悪は自分自身が扱ふのであるが、禍福は自分自身に決定権がないのである。そこで自分が福を求めようとすれば、善の道以外に他に道はないのである。したがって

老祖は紅卍字会の設立を命じられ、それによって衆生を渡すくわれるのであり、これは即ち苦海における慈航である。卍字会は専ら慈善によって救済する責任を負っており、日常においては診療所、医院、孤児、養老院、身体傷害者収容施設、因利局（無利息で貸付ける銀行）、小学校などを設けている。これは各地における卍字会の情況や、修人の願力（発願して出す力）に応じて、慈善事業の規模にも大小はあるが、いずれにしても各地に於ける貧困者、老人、病人等、身寄りのない人たちが得られる実利と恩恵は、とりもなおさず修人が善を為した結晶であり、又慈航に登る階段であり、福を得てこれに報いる橋梁でもあるのである。

道を行なえば福があり、人を救うことは即ち自からを救うことであり、これが天道の易かることのない法則であり、因果、感応の理でもある。それは専ら個人の福利だけを求めんがために神仏を礼拝している者などと比較できるものではないのである。

われわれは道を修める以上、当然必ず道を行なわなければならぬ。それには先ず己自身を正すことによって人を正すので、それから人の為に幸福をはかって物を済すくうのである。

自分の力でできることを逐一実行し、矜おごり誇ることなく、専ら実践を積み重ねていけば、その福祿富貴、吉祥安樂快適は、必ず期せずして訪れて来るのである。いわゆる三千の功が満ちて、八百の行が圓まどかとなり、功行が圓満になれば、自分では道を得ようとしなくても道は手中にあり、福は求めようとしなくても福は自から訪れて来るのである。

註一、中庸に「君子は其の位に素して行ない、其の外を願わず」とあり、君子は現在おかれている環境、立場、地位において全力を尽くして、ひたすら勤めるべきことを勤め、後日の報いや期待を考えないのである。

註二、論語及び易経の中に「君子は思うこと其の位を出でず」とあり、君子は現在の境遇位地に即して当に思うべきことを思い、当に為すべきことを為し、自分のおかれている境遇以外のことや、位地以上のことを考えない。即ち分不相応なことを考え

ないで、現在の分に安んずることである。

註三、天の道はその本に還かえることを好むとは善因善果、悪因悪果で因果応報をいう。

註四、易の坤卦に「積善の家に必ず余慶あり」とある、善行を積み重ねて行っている家には、本人自身が幸福を得られるだけでなく子孫に迄およぶ恩沢があるのである。

## (五) 慈善とは何か

慈善の二字に含まれている意味は非常に広範囲にわたっていて、それは金銭面だけに限らない、故に功德の大小は決してその施ほどこした金額の多少によって区別することはできないのである、ただ金銭を以て救済するのは、その効果が早く、しかも顕著である、もし能く至誠によって行なえば功德を立てることも比較的容易である。

しかし、その主要なことはいせん「心を存する」(註一)ことに在ある。仁愛の心を存することを慈といい、方便(註二)を多く行なうことを善といっている。一言一語の間といえども人のためになることをはかり、心中別に作為がなければ言語や態度は

自から温和となり、知らずしらずの間に多くの功德を積むことができるのである。

昔の善人というのは何時でも、何事においても皆世のため人のためという考えに立っていて、少しも悪をなすという気持ちはなかったのである。故に己自身を律するところが謹厳であって、毎日平常の間において功過格（註三）を作り、善行を大小の幾つかに分けて、日々これを実行し、日々これを記帳して精進した。したがって、その心中には外的ことなど考える暇はなく、ただ善根功德を積み重ねていくだけであって、必ずしも日々金銭を消費するとは限らないのである。

ただ時々<sup>つね</sup>に人の身になって考えるので、自分自身が望まないことは人も又同様に望まないであり、自分自身が困難だと思ふことは人も又同様に困難なのである。

富貴貧賤というのは生れてからそうなったのではないのである。そこで相手の立場になつて考え、たとえ思考は各人が違つていても、その思考以前の心理というのは人も我もみな同じであり、そこで慈善の憐憫の情が自から油然而して起つてくるのである。

善を為し慈を行うのは、ただ実際に在る。そこで実行を篤く積み重ねてゆく者にして、はじめて名誉も又自からこれにともなつてくるのである。この言葉を反復熟読せ

んことを望むのである。そうすれば恐らく金銭の有無によって慈善を為すか否かを決定するような考えはおこらないであらう。

註一、孟子に「其の心を存し、其の性を養うは、天に事うるゆえんなり」とある。

少しでも物欲が混入すれば、この心は存在したり、不在になったりする。すべて物欲のために閉ざされ蔽われればこの心は一たび放たれてもう存在しないのである。大  
学で言う「心ここに在らざれば視れども見えず、聴けども聞こえず、食えどもその味  
を知らず」や、孟子の言う「その放心を求める」ことが皆道を学ぶ者にとって極めて  
大切な教えである。一心が不在であれば則ち放たれ、一たび放たれば則ち失なわれ  
る。故に「操れば則ち存し、舎てれば則ち亡ぶ」と言っている。心を存するとはその  
放心を求めることである。

註二、仏が衆生を導くために施す臨機の処置、便宜の方法を言う。

註三、功過格、日記のように一冊を三百六十五日に分け、各日に功と過の二欄を設  
け、更に行為の項目に細別し、日々善行と悪行を記して善に進むべき手段とする。又  
道教関係ではその行為の善悪大小軽重によって鬼神が禍福を下すという信仰があり、

功過格はその経典である。人の日常の行為を善（功）と悪（過）に二大別し、夜間、自分の一日の行為を省みて、その功と過の数を調べ、その点数を計算してこれを記入し、月末には一月間、年末には一年間の点数を総計して、若し過失が多ければ改善に努め、善功が多ければ益々励んで福を多く受けることに努める。

## (六) 勤 勉 儉 約

勤（勤勉）と儉（儉約）の二字は実に徳に入るところの門であって、一生涯を通じてこれを実行しなければならぬ、勤は能く拙を補い（勤勉によって能くそのいたらないところを補うことができる）、儉は以て廉を養う（儉約によって廉潔の心を養うことができる）と、何と素晴らしい言葉ではないであろうか。世間の人がもし能くこの勤（勤勉）と儉（儉約）の二字を心頭に銘記することができれば、一生涯失敗する事はないのである。

すべて人が功業を建てたのは、もとより時機にうまくめぐりあって、その勢いに乗じて起ち上ったものであるが、しかし、これらのことは実に百人に一人もないので

得難いことである。そこで労苦をもとめせず、自ら怠ることなく、刻苦精勵、勤勉儉約して修行すれば、世に処する場合、自から能く泰然自若として対応ができ、過失を犯すようなことはないのである。

儉約というのは実に克己（己に打ち克つ）の工夫であり、これも内と外に分けることができる。内に対しては儉という。内に対するとは即ち己自身に對することである。儉は能く廉を養うことができ、自から能く徳に進むことができるので、その徳が全身に充ちあふれて外面にまでその輝きを現わし、その徳が身をうるおして心は広々として、体はすこやかになる工夫を実践することは難かしくないのである。

外に対しては吝嗇（けち）という。外に対してとは即ち人に対することである。ひとたび吝嗇の心が起れば、吝嗇の行ないがこれについてき、吝嗇の行ないがあらわれれば道から遠ざかっていくのである。

現在の社会における大多数の人たちについて言えば、その生活を楽しむ面においてはそれ程豊かでないかも知れないが、しかし、それでも無駄使いや浪費を改めて、少しでも儉約するということは別に難かしいことではないのである。ただ習慣上少し不便を感じるだけである。もし能く贅沢の習慣を少しでも改めることができれば、長い

間には儉約することが習慣となつてくるのである。

今日の世情は昔のように純朴でなくなり、人心も日に日に荒廃してきているが、一体その原因はどこにあるのであろうか。それは贅沢と浪費にほかならないのである。すなわち贅沢をしては虚栄心を満足させ、浪費をしては享楽をほしのままにし、相互に競いあつているのであり、そこで財や金銭が不足してくると、ありとあらゆる方法を構じ、陰謀術策をめぐらして、あくまでそれを求めようとするのである。これを求めても得られなければ、それこそ不正な手段まで採るようになり、多くの悪行がここから起つてくるのである。今日の人心というものは実に寒心にたえないのであり、また世の乱れもこれを救いようがないのである。

そこで儉と不儉の間の差は、ほんのわずかではあるが、その結果はやがて普通の尺度では律することができない程、大きな開きがでてくるのである。孟子は「約を守りて博く施すものは善道なり」と言っているが約を守るとは即ち内に対する勤勉儉約であり、博く施すとは即ち外に対する慈善である。勤勉儉約は乃ち慈善の基であり、もし勤勉儉約でなければ、自然に贅沢に流れるようになり、この贅沢には止まるところがないのである、したがって経済はいつもひっ迫するようになり、善心はいつまでた

つてもこれを発動させる機会がなくなり、たとえ慈善を語ったとしても隔靴搔癢の感  
を免れないのである。

そこで吝嗇であることは、もとよりよいことではないが、贅沢は更にいけないこと  
である。いまの人は多くが勤勉儉約を古い時代おくれの考え方で、近代に適応性がな  
いと思っていて、世道人心にいかにも重大な関係があるかということを知らないのであ  
る。世のなりゆきを憂えている人は迷夢から醒めてもらうために声を大にして叫んで  
頂き度いのである。

「奢る者は富が足らず、儉する者は貧しくて余りあり、奢る者は心常に貧しく、儉  
する者は心常に富む」

## 編集後記

○ここに道慈資料第三集として「道院と紅卍字会の歴史」の小冊子を謙訳出版いたしました。

○衆知のように道院(道)と紅卍字会(慈)は道を修め慈を施すところですが、聖哲の訓にも「道とは未だ顕(あらわ)れないところの慈であり、慈とはすでに顕(あらわ)れたところの道である。道心がなければ慈業を拡(ひろ)めることはできず、慈業がなければ道心を証(あかし)することはできない」と示されています。

○この意味におきましても、道慈は本来一にして二であり、二にして一のものであります。そこで一方のみに偏(ひとよ)ることなく、あくまで内修(道)外慈として車の両輪の如く平行して進めることが大切です。

○また慈善のはたらきにも、法施と財施があり、徳望や学問、言語、文学などで道を拡(ひろ)める功德を法施と言い、財貨や物質的に功德を積むことを財施と言つて、両方ともに必要です、徳や学のある人は徳や学で、財のある人は財で、各人がそれぞれその誠心を尽くすことが最も大切であると示されています。

○この小冊子によつて道院、紅卍字会が正しく認識され、また一人でも多くの人が真の道慈の主旨を理解することができれば、委員一同の非常な喜びとするところであります。

昭和五十四年七月八日 初版発行

平成七年三月一日 第二刷発行

## 「道院紅卍字会の歴史」

編集翻訳 東京総院道慈宣闡委員会

印刷所 太陽印刷工業株式会社

発行者 社団法人 日本紅卍字会

東京都中央区銀座五ノ九ノ十二

(ダイヤモンドビル三階)

電話〇三―三三三―五七二―一八二四三

